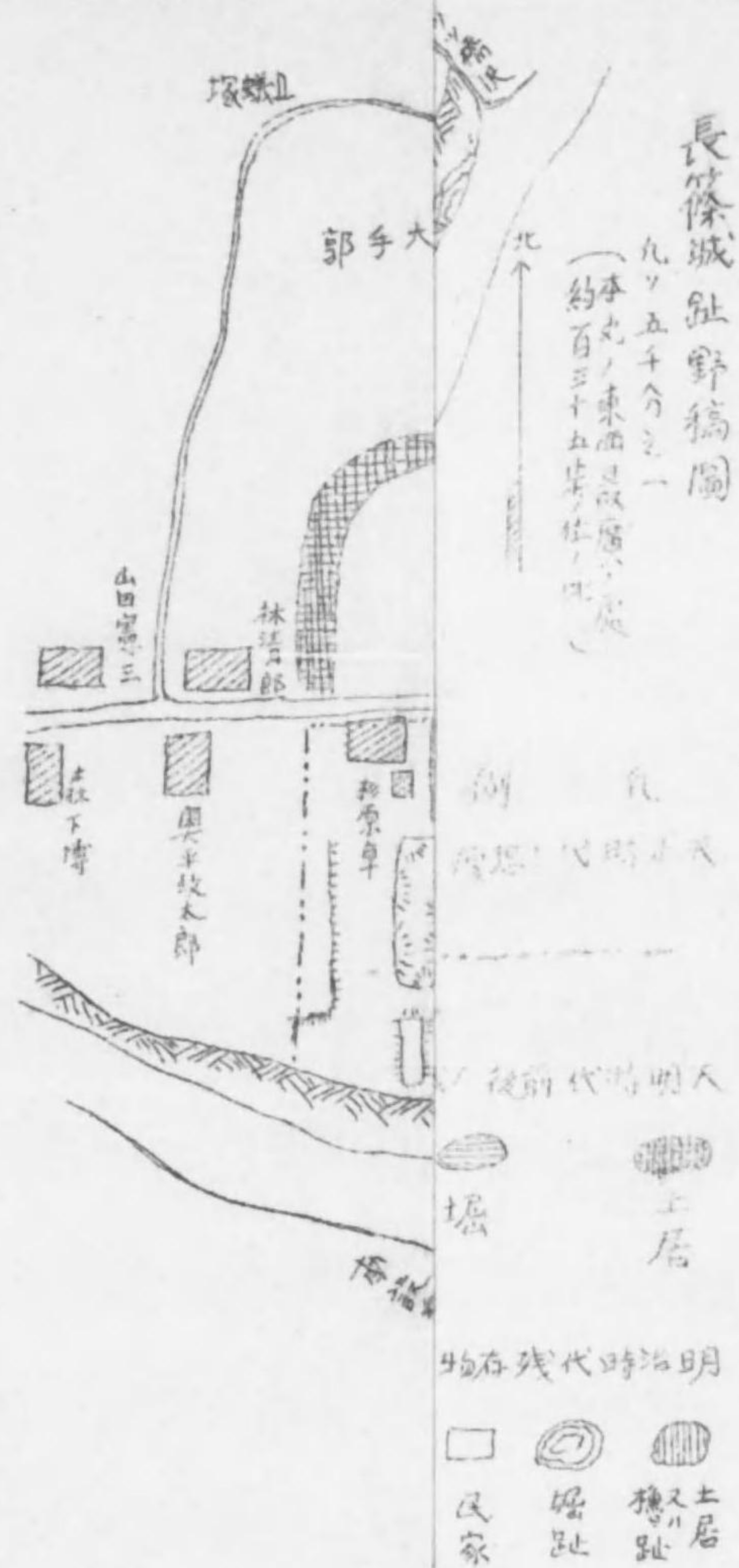


特 256
555



昭和十年五月

目次

はしがき 一

長條城趾と其附近の地形と地質 二

長條城郭と其遺蹟の残存部に就きて 三

天正時代の長條城に就きて私の解説 七

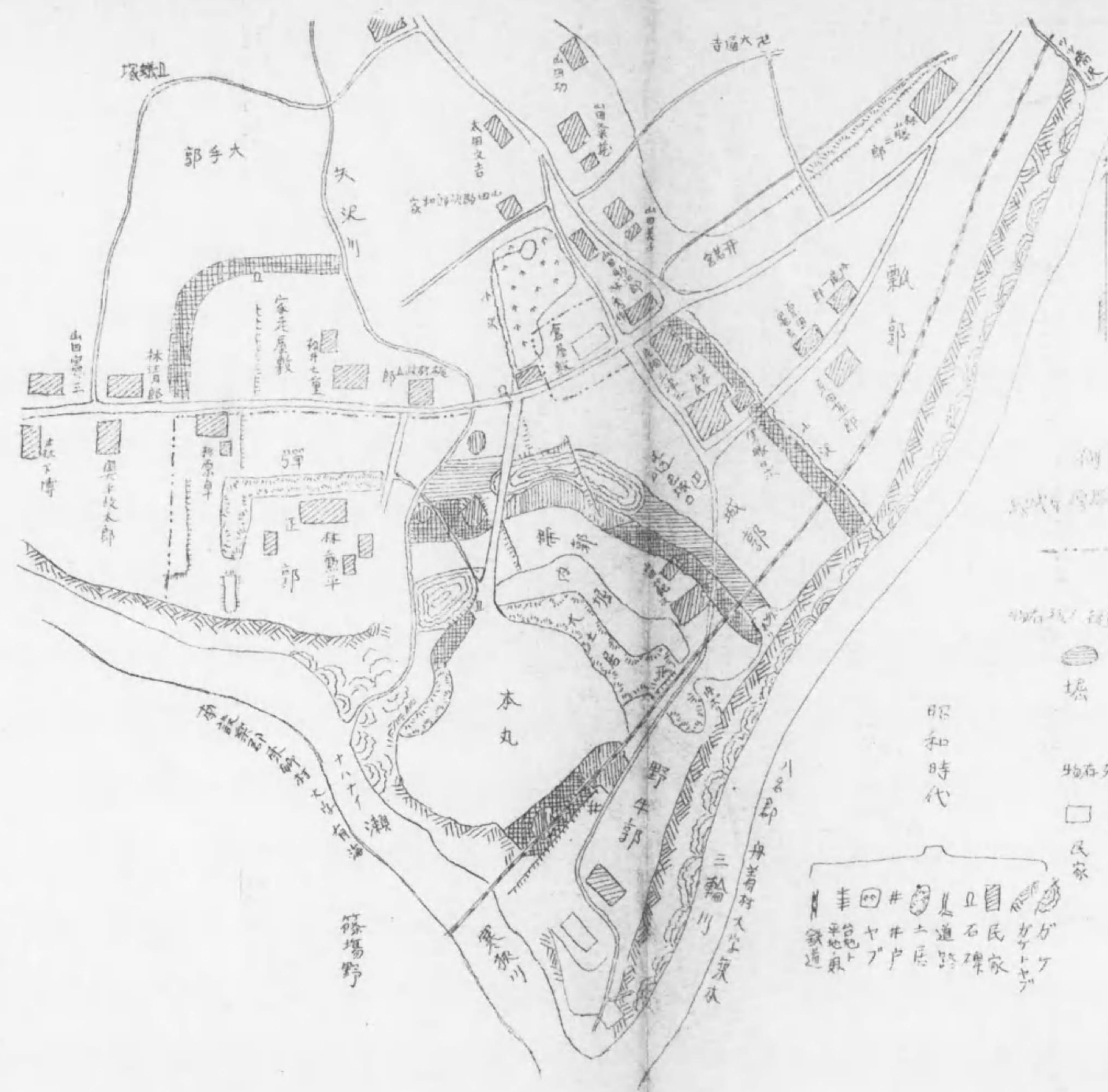
長條城の名称 一四

長條城に關係ある人々の系圖に就きて 一四

長條城と戦鬪 一六

以上

特 256
558



長條城跡野稿圖

凡五ヶ所
(本丸、東門、西門、南門、北門)
約百三十五坪

北

河川
→

堀

堀
土居

昭和時代

堀

堀跡
土居跡

- 本丸
- 大御所御所
- 御守屋敷
- 御膳所
- 御宿
- 御馬場
- 御茶屋
- 御本陣
- 御陣
- 御門
- 御石
- 御家
- 御民
- 御道
- 御井
- 御土
- 御跡
- 御家

昭和十年五月

以上

改訂 長篠城の今昔

柳原明十



かき

地に徳富蘓峯合註の爲めに長篠城の説明をした草稿を綴つて
篠城の全譜と題した小冊子を知人に分つたことがある。以来私とししま
何となく不満足の處もあつたので再び古城趾と其附近とを足測し更に土
地の古老にも聴き一面又新たに古文献を入手することが出来たので前回
よりも幾分たりとも信據すべき事項に到達したものと信じて今回改訂し
たものを物して長篠城を世間に紹介することにした。然れば前回の長篠城
の今昔なるものは本篇を綴る一階段に過ぎないものであつたのである。

本篇を綴る参考書類と事項とは

- 一。私所有の長篠戦争研究資料四十餘種類の戦記
- 一。元禄甲戌七年三月に上司より諮問されて答申せしものと見ゆる長篠



古城記なるもの

一、天明壬寅二年十二月是れ亦上司より諮問されて答申せしものと見ゆ
る長藤古城地理丁間及び其追加記並びに同記の附図とも申すべし
長藤城の図

一、自ら歩測して野稿図を製作しつゝ土地の古老甲乙より聴き
一、昭和十年に九十一才の老翁で然かも長藤古城跡内に居住の松井七重
氏及び同年に七十八才に達せる長藤の住人太田亀三郎氏により實地
に就き説明を聴き又同氏等の云ひ傳へを聴くソレデ両氏共長藤村に
於ける智識階級の方々に今尚ほ豊饒。

以上により改訂せられたる 改訂長藤城の今昔の図に就きては相當苦心
したものであるから今後長藤戦に就き戦記を讀み又實地を踏査せよと
いふ人の爲めには確かに案考にはなり得るものと信ずる。
尚ほ云ふ長藤古城図に就きては巷間傳へられたるものに数種類がある
が何れも實地に就きアテハメやうとすると頗る困難を感ずる殊に權威あ

る案謀本部著長藤戦役の附図にある長藤古城図なども只古図より引用し
たりとのみありて其出所詳かならざるのみならず現今の地形の實際と符
合せぬ所が多々あるやうであることは甚だ遺憾である

回 長藤城跡と其附近の地形と地質

地形は是れを次ぎの四ツに區別す

- 一 丘陵地
- 一 臺地
- 一 平地
- 一 溪谷

丘陵地とは大通寺山一帯の地域をいひ其頂上は平垣の廣場で標高は水
丸の平地から見ても僅かに十数間の高さで東西南の三方面に緩斜して居る
而して大通寺前の林藤三郎氏宅背より若宮邊迄及び若宮邊より山田美子
氏山田兼藏氏等の宅の背後にかけての一帯の地は丘陵斜下の一部を占め
小断崖(人工的にも)をして居る此小断崖線により大通寺山斜下の三方面
を帯の如く丘陵地を取り巻きて臺地をなして居る。平地は三所ではれを
市場平、水丸平、殿敷平に區別した勿論此名称は私だけの臨時の假称である

而して此三平地は大体に於て殆ど同標高を保つと認む。市場平は大通寺前の下方で古城趾の東邊を占め西するに従つて緩斜をなし矢澤川溪谷に達して居る其間人工的に一ニの小階段がある。本丸平地は本丸だけの平地で西は寒狭川に接し東南は鉄路を界に数尺の低さをなす野牛郭に連り西より北にかけては断崖と緩斜とを以て谷澤川溪谷と市場平の西部の緩斜地に連なつて居る。殿敷平は城趾の西北一帯で蟻塚附近が最も平坦であるがソレよ東しては谷澤川溪谷に緩斜をなし南方へも亦多少の緩斜をなし彈正郭と称する一郭とは一凹地を挟んで連つて居る。

ツツ橋澤溪谷は市場平の東を限り流れは短かけれども谷は存外深くある。矢澤川溪谷は市場平と殿敷平との間を流るる小川で初めは数尺の溪谷であるが彈正郭と本丸との堺に至りては十数尺の溪谷となり終には数尺の新崖となりて寒狭川に連するのである。

地質は大通寺山丘稜部は結晶片岩層で此岩層は凹凸起伏の変化ある状態にて前記三平地々方に斜下して寒狭川及び三輪川沿岸に達し、に大

断崖をなして大露出をして居る。洪積層は前記三平地を構成し結晶片岩層を覆ふて居る上層は黒色の腐植質土で下層は黒色の腐植土又は砂質土中に礫を交へて居る此洪積層の厚さは一定しないが大凡五十五八内外であるから小断崖をなす所には結晶片岩層の露出を見る。

水脈は結晶片岩層間又は結晶片岩層と洪積層の接觸部にあつて井戸の深さ十五尺を越ゆるもの少ない。

回 旧長篠城郭と其遺蹟の残存部に就きて

旧長篠城郭は東南と西南の二方面は三輪川と寒狭川とによりて限られ東はツツ橋沢を界に北より西にかけては大通寺前の臺地の縁邊を界として少しいの斜面を西して矢沢川に達しそれより蟻塚附近に至り西方は蟻塚附近より南して林清五郎氏奥平政太郎氏の附近に至る一線を以て限られたるもの、如くなれども遺憾ながら判然として居らぬ然し大休から見ても其形恰かも三輪寒狭の両川の會合する處を要として北方に扇を開きたる

が如く見ゆ奥平氏が末廣城とか扇状とか呼んだのは是れが爲めである。面積は文化元年甲子春渡邊道閑、政地彦作兩氏の測量では二千九百九十坪とありが天正三年より百二十年後の元禄七年三月の書きものでさへ城の境界がハッキリして居らぬのであるからソレから又百二十年後の實査でも尚ほハッキリして居らぬのが當然であると思ふに何十何坪と出してあるのは怪しい。又或る書物には東西百八十間南北百三十間とあるが是れもあまりあてにはならぬ。現存旧状其まゝに近しいと思ふ本丸でさへ東西四十間南北二十五間と載せしある書き物が多数であるが現在の状況では東西も南北も畧々同じである。畢竟長條城の北より西にかけての境界がハッキリして居らぬから面積とが長さなどが明瞭せぬのである。是れも長條城の存在期が永正五年から天正三年迄約六十餘年間で其後は移轉の爲め形骸だけが残りて今日迄星霜三百五十餘年を過ぎたことであるから無理もないことである。

次に全城内を元の大小九ツの郭に區別してあつた

- 本丸
- 野牛郭
- 帯郭
- 巴城郭
- 瓢郭(ふくご)

- 倉屋敷
- 彈正郭
- 家老屋敷
- 大手郭

按ずるに郭敷に付きては諸書まろくで家老屋敷や倉屋敷などは郭として数へられて居らなかつた向きもある。又大手郭なども其有無さへ不明とあるものもあつたが元禄七甲戌七月の古文書長條城の記事中郭敷本丸共大小九ツ如此雖申傳郭の所々不明とあるが兎に角九郭のことは確からしく其末尾にも此書付は古證文或は記録功者之輩又は右に所々数住居に先翁おに至る迄重々遂吟味爲後鑑書注し者也とあるソレから以後の書き物は皆是れにならつて居るらしい比較的確實と思ふ。天明二年十二月の古文書も同様に書いてある。文化年間の渡邊政地兩氏の實測圖など寧ろズサンなものではないかと思ふ。

昭和十年に於ける長條古城跡の残存部の記事

○土居と堀の跡 城の東北隅で大通寺山麓の臺地の断崖の上で林藤三郎氏の裏手の小徑に沿つて西に至る所謂瓢郭の外郭をなす俗に堀切土居

と称する部分に凡そ百ニ三十歩の間に亘り三尺巾の水無し堀があつて其堀り取つた土を一方に積上げたる形のものが小土居となつて残つて居る現在では草ボリたる凹凸地であるが是れも明治年間にはまだ三四十歩程西に延びて居つたのであるが大通寺正面の石段を造り又耕地にするが爲めに崩されてしまつた

○若宮様 堀切土居の西端に近く森があつて其内に祭られたる石祠が三棟ある勿論皆小なるもののみである 旧記に此石祠の内鰐口を納めたるが若宮様で其鰐口は長篠城主奥平信昌が本社を城の鎮守の神として崇敬の爲めに奉納したものととしてあるが其鰐口も行方不明の由ではあるが宮下の原田亀吉氏主となつて年々祭事を行つて居る

○溜池の水源池或は溜池の残存部と竹林趾 大通寺山麓の墓地の西の下端で縣道の西に林要太郎氏と山田野次郎氏及び同氏和家との間の附近に竹林があつて其竹林中に二坪内外の水溜りがある 是れは長篠城の内堀外堀に引用したる濠水として貯水したる池の残存部か或は貯水池

の水源地である 竹林も往昔は此溜池の東方縣道を越へて山田美子氏の前より林秀作氏宅を取り入れて若宮下近く迄繁茂して居つたから城壁の一部に充てたものであらん 當時の戦記を見ると何れも次の如く書き載せてある 長篠城に侵入するに適當なる場所が無いので容易に攻めし能はざるを看取したる大通寺山の主将馬場信房は五月十四日貯水池に沿ふた竹の大密林を切り破りコゝより瓢郭に入り倉庫をも攻め云々とある然れば此大竹林は城壁の一部となすに足る程の大密林であつたならんが明治時代から見ても餘程狭くなつて来た 然し現存するものが其當時の残存部であるや否は不明であるが其位置に就きては大して変りはないものと認める

○外堀跡 鉄道線路の東側で三輪川の断崖に向つて一凹地がある 方六七間餘で現在は畑地となつて居るが里人は外堀跡と称へて居るケタシ帯郭と巴城郭との間に横はりたる外堀跡は單に堀の残存部である
○内堀跡 外堀跡の五六間程南に外堀跡と同様でやゝ小なる形を有する

畑地の凹處がある是れ亦里人が内堀跡と稱へて居る是れは大土居の北を周ぐる内堀の中断せられたるものである

○大土居 本丸の東北部に築かれたる高十数尺長さ約百歩 是れを里人は大土居と呼んで居る 是れは昔の末、に近むものと想像される

次に其東端で鐵路と道路とを隔て、小丘をなすものは大土居の一部と見て差支はない畢竟此小丘と大土居との中間が人工的に変革せられたものである 此小丘の南に接して三畝歩程の水田がある引用水源は此小丘の底邊から湧出するらしい 元龜年間菅沼正貞が徳川軍の爲めに野牛郭及び其他を焼かれたるに鑑み徳川方の奥平氏が溜池を造りたるものガイツの間にか田と畑とに変わった

○内堀 大土居の外邊を用る現在立派な濠で所々水を湛へて居る其西端は公園入口より矢沢川迄三四十歩の間は既に埋められ畑地となつて居り又其東端は鐵路と道路とによりて一端を断たれて居る此中断ヶ所は昔は濠水を堀内に導ゝる爲めに即ち濠水が三輪川に流出を防ぐとい

ふ意味も含まれてならんか水門（或七門）が造られてあつたことが天明二年の古図に「此所水門今にあり」と書き載せてある 尚ほ西端の埋められたことは松井七重翁の現地での直話である

○三ヶの遺跡 本丸と鐵路との間又鐵路に接して三ヶの遺跡がある即ち大土居の下手に半円状の凹地がある是れ籠城當時の馬屋の所在地であつたと稱して居る其遺跡との記録がある 其南に本丸平地より一段低い処に四間四方位の四角の平地がある是れを櫓跡と稱して居る 明治の初年には此櫓跡は本丸平地より九尺程高くあつたものが人工的に低くなり鐵路を開くに就いて一層低くせられて其中間を鐵路が通ることになつたとは是れ亦松井翁の現地での直話である 又此櫓跡の両の下手に殿井と稱する井戸がある籠城當時唯一の用水であつたと傳へて居る現在に於ても清水がコン／＼として湧出して居る 明治の中年頃井戸を整理したので少々小さくなつたとは此井戸水を使用して居られた菅沼庄十氏の直話

○野牛門趾 三輪川と寒狭川との出合の処で河の水面より凡そ四十尺程の高さの処に十四五歩四方の平地がある。私は是れを野牛門趾と思ふ。居る里人や古図では此邊をヤグラ土場と称して居るが、櫓跡でも土場でもないと思ふ。松井翁は櫓は五ヶ所しか無かつたと思つて居るから、コゝは門趾であらうとの私への直話。

○本丸土居跡 本丸の西の隅で矢沢川に對して小高き所がある相當の面積を有して居る。土居の形といふよりも土が流水落ちたとしてもいふ斜面形である。屢々採土するので私が知り初めた頃より段々履城も小さく高さも低くなつて来たやうである。兼謀本部著長藤役附圖にはコゝに櫓でもあつたらしい印がしてあるが、天明の古図には土居はあつても櫓のことが書いてない。松井翁の直話ではコゝは土居を崩してコンナ形となつたが、櫓跡らしいものは無かつたとのこと。又本丸の南の隅に近く十歩四方で二三尺四方もあらんかと思はる、盛リ土がある。松井翁の直話によると、是れは土居跡ではない。明治年間に

本丸の南端が崩れたので古蹟を保護する意味で縣から補助金を貰つて崩壊所を修繕をした時の土の残りである。是れは取り捨てぬはならぬものであるが、このまゝにして置いては後の人を誤らす種だとのこと。

兼謀本部戦史附圖には土居跡の印があるから、其残存部と考へて私も前回の「長祿城の今昔」では土居の残存部とやらかした。松井翁に従へばやはり誤りであつた。因に松井翁は土地の所有者で補助金を貰つて修繕をした本人である。

○彈正郭の土居 林勲平氏の住宅を周りに直角に土居がある。是れに就きては後章に述べらるが、是れは天正時代のものではないことを断つて置く。○設樂稲荷社 大土居の東端にある石祠がソレである。永正五年に菅沼元成が築城の際鎮守の神として菅沼氏登祥の地たる作手村の菅沼城から移したものであるといひ傳へて居る。石祠内に納められたる二個の石標の一には享保二十年乙卯六月とあり、他には林六右とだけ讀み得るが、其他を知ることが出来ぬ。永正と享保とは年代に於て大なる距

があるが其れが何の理由によるものか一寸知ることが出来ぬ 然し傳説には此社には使神としてお鹿狐が附随して来た然るに戦後城は全部移轉しても此社だけ残されて祭り手が無いのでおとら狐が活動する事になつたから村人が是れには相當悩まされた由で其爲め時々供養したとの記事もあるが此享保年間のも其供養の印ではあるまいか

◎ 天正時代の長篠城に就きて私の解説

本丸。昔も今も大差なきものと認む 此郭に門が二ヶ所一は大手門と稱し城の正門にて今の蹟長篠古城址の標柱のある附近なるべく一は東の野牛郭に出入りの門で門の名は不明であるが櫓と馬屋との間にあつたものと信ずる 尚ほ此本丸中に櫓が一ヶ所あつたソレは今の鐵道線路の西側に沿つて前記の櫓跡から土居が続いて居つた其土居の寒狭川に近い方で現今の断崖界から二十歩も離れた(櫓に近よつた)邊に土居の上に更に少々高い土台があつた城の南の櫓は其上に置かれたものならんと松井翁の現

地にての直話 ソコで此土居に沿ふた内側即ち本丸内は溝の形をした凹地であつたが本丸全体を平地化する爲めに此土居を削りて埋めたものである 是れ迄雨天には水の道であつた此凹地を無理に埋めたから其爲めに大雨の節此本丸の南端が雨水の爲めに崩れて私が縣の補助金で修繕することになりまゝした 是れも明治時代の話である松井翁の直話 ソレから西へ廻つて矢澤川縁より内堀跡に接して蹟長篠城址の標柱のある邊迄は土居があつたのであるソレが本丸を平らにし内堀を埋める爲めに現今の如く一端に土居趾らしきもののみを残して他は本丸と同じ平地となつた 然し本丸平地と内堀跡との界は石垣の階段で残つて居る 是れも松井翁の直話 尚ほ本丸の寒狭川方面だけは土居は無かつたらしい野牛郭。本丸の東南で本丸より八九尺も低くて三輪川と寒狭川とに接する一郭である東北端は大土居の一部で内堀を隔て、帶郭に西北は階段によつて本丸に接して居る大体の形に於て今も天正時代も大差はないものと思ふ 此郭にニツの門があつた一ツは本丸に通ずる門で一ツは渡合に

面した野牛門である。帯郭に接した所にも門があつたと示してある。古園もあるが私は門は無かつたと信ずる一人である。ソレは此郭の南端の半地に明治二十何年頃に出来て明治の末年に廢止した長盛社といふ運賃會社の跡がある。松井翁の必要上私も此會社には數回出入したものである。此會社の出来た時大土居の一部即ち古園に門としてある處を切斷して車道を開いた。其車道を造らぬ前には小徑によつて土居を乗り越したものであるとは此附近の老人の語である。又松井翁の直話でもある。又松井翁は土居を越さずに土居の最外部を廻つて小徑があつたとも申された。策謀本部の長藤城概図にはコゝに通用門らしきものがあり野牛郭に属する大土居の内側にも堀があつたと書いてある。此内側の堀は其堀ではなくて水溜であつて敵の焼打ちに備へたものならんと思ふ。現今の地形から考へても内堀の水を此土居の内側に導くことは絶対に出来ないことである。然れば策謀本部著として門も堀も一寸信用が出来兼ねる。

附記 内堀から大土居本丸の大半野牛郭の大半は松井七重翁の所有地

であつたが長藤城址を保存する爲めに鐵道沿線の地約一反八畝歩程を長藤村に引渡した由であるが其他は今に異動はないとのこと。されば此附近に於ける土地の変化に就ての松井翁の語は極めて價值あるものと信ずる。

帯郭 内堀の外郭を周つて三輪川べりから矢澤川べり迄^達居つたものならん。東方には大した工作物は無かつたやうであるが矢澤川に接した即ち大手門入口より西にはニツの櫓があつた。現在の地図で公園入口街道と彈正郭とを連絡する小徑との間に約四間^間六間の^間廣さで高さ二間もあるうかと思ふ所謂隅櫓と稱した櫓の跡と例の小徑と矢澤川との間に小櫓の土台があつたとは松井翁の現地に於ける直話である。天明の古園に依つて考へると此ニツの櫓はニツの櫓を連結して居る土居の上に更に土を盛り上げたものであるらしい。茲に説明の出来ないのは此ニツの櫓を連絡して居る土居の本丸に接した部分のことである。コゝには多少の空地があるべき筈であるがソレが何であつたか不明である。松井翁も此處に

記すは明瞭に話されなかつた

此隅禮趾の土居と少しの平地を隔てて相對し東側から帶郭を周して稍曲尺手に丸入數十歩の間に土居が残つて居つたがソレを私が掘り崩して現在の畑地としたとは松井翁の語である。此土居はかくいふ明十も幾分記憶に残つて居る處である。天明の圖で見ると此土居は東々南に延びて現在の外堀跡の南側に追築造されたまゝであつたやうである。此土居と前記の内堀との間が即ち帶郭である。今民家一戸畑範ある。此郭には門がニツあつたらしい即ち大手門の筋に出るものと巴城郭に通ずるものであつたと思ふ門の名は何れも不明であるが巴城郭に通ずる處は巴城口と称へたらしいと書いてある。

外堀 帶郭の土居の外郭を西方矢澤川より東方三輪川に達する堀を外堀と呼んで居るカラ堀であるとの書き物が多数であり又天明の古城趾記事にもカラ堀とあるが元禄七年の古文書には「所々有水と記載されてある所から見ると最初からカラ堀ではなくて水堀であつたとする方がよいと

思ふ 又一面から理屈攻めにして考へても溜池から城の濠に水を引いたとすれば其取口が此堀に當るのであるから水堀であるのが當然と思ふ。天明時代には全部がカラ堀として残つて居つたことが記述してあるのは堀が埋まつて水が無くなつたと見へる。松井翁の直話によると矢澤川より東へ餘程長い間淺いカラ堀であつて其餘は堀形は無かつたと記憶して居る。西方のカラ堀は私が帶郭残存の土居を崩して畑地を造るときに埋めてしまひましたと申された。

巴城郭 現在では一と續きの平地となつて居るから其境界が明瞭でないが古圖に依つて想像すると外堀の東北にあつて一部は三輪川に接し東北は低き土居と小なる堀によつて飄郭に隣り北の一部は倉庫敷に連り西端は矢澤川へり追延びて居つたやうである。飄郭に接するといふ位置は現在伊藤々次氏宅と原田喜一郎氏宅との間を流るゝ小溝がある。此小溝の両縁に小土居があつてソレが境界をなして居つたものと認むる。尤も是れは確定的ではないが天明の古圖に此邊に近年迄土居と小溝とがあつたが

今は埋めて畑となつたと記入してある処から私が此邊なるべしと想像したのである。此土居の一端は三輪川べう迄ありたらしいが他端は明瞭でないが倉屋敷の一部に接続して居つたものならん其接続所は現今の縣道側の片桐三津藏氏宅附近であらん又倉屋敷の方にも土居はありたならんが今調査の方法がない

此郭の西端で矢沢川に接した處に櫓があつて其臺が明治の初年迄残つて居つた然かも平地から九尺も高かつたとは松井翁の現在直語である

是れも其後外堀の埋め草となつて今の畑地となつた

瓢郭 城の東端で東は三輪川とツツ橋澤とで北から西へかけては例の堀切土居で大通前の台地に接して居る西は一部は倉屋敷で他は小土居と小溝とに依つて巴城郭に隣りして居る而して堀切土居と倉屋敷との間は戦史に書き現はされたる竹の密林である 現在林秀作氏宅山田美子氏宅山田駒次郎氏宅などは竹林跡に建てられたるものならん

此郭には巴城郭に通ずる門とツツ橋澤を渡つて城外に通ずる搦手木戸

といふがあつた 是れに對して是れは門であるイヤ水戸であるイヤ出入口は無かつたと様々の議論はあるが私は長祿戦に對する權威者故牧野文齋翁に従つて搦手木戸があつたと主張するものである

倉屋敷 瓢郭の西端の一部を占めた獨立の郭で竹林と溜池とによつて郭外に接して居る 小なれども長祿城九郭の一つであつた 現在では二間道路の北側だと稱して居るが實際は此道路に跨が^{つて居る}の即ち後に出来た道路が屋敷を両分したものであると思ふ

此屋敷は後日傳説のお虎狼を射つた林氏の宅趾 鳥居勝高や馬場信房の碑を建てた林藤太夫の宅趾 天明頃には百性半右工門の宅趾 明治になつて林頼平氏の宅地となり一般に門屋と呼んだが明治の末年には絶家となり大正になつて居宅を取拂ひ只今畑地となつて居る

彈正郭 矢澤川の両で直角の土居に屈まれて居る林頼平氏宅を一般にクルクと呼んで居る策謀本部の著書や其他の多くの地図では此一郭を彈正郭と稱して居るが古文書や古老の語や地質學の上から考へて彈正郭とい

ふはコンナ小なるものでは無かつたやうである 先づ地質學の上から見
て此附近一帯の洪積層は前述せるが如く上下兩層が屢別し易き筈のもの
であるのに實際は屢々人工を加へられた結果として上下兩層の屢別が
かぬ程に堀り返へされた跡が残つて居る 古文献の方で天明二年長篠古
城地理丁間記追加で見ると 東西南北二十五間ツとあるは非なるべし
今丁間を心ハカ見るに七八十間四方有之尤も地面不同なれば間敷も定めかた
し云々 とある 是れで見ると餘程廣かるべく考へらるゝが現在郭と稱
する所は本丸よりも狭く見へる 七十八翁太田龜三郎氏は語るアノ土居
は後から築造したものだと聞いて居る 土居の上の松を見られよあれは
百年か百二三十年位にしかならぬではないかと 九十一翁松井七重氏は
語る 私の家は林勲平氏の祖先から分れたものである今から百四五十年
以前は林家は盛りの絶頂にあつたもので梶村政五郎氏の家の前に立て
郭即ち林家に入る道路を指し此立派な道路を造る傍ら畑を田に改造する
が目的で又改五郎氏前の田を指しこゝが元は茶畑であつたのを其土を

以て道路とアノ土居を築いたツシテ四間六間の家宅を築造した とは私
の老祖母の私への直語であります 土居の松も私は高さ八九尺の小松で
あつたことを知つて居ります 私のアノ土居は彈正郭とは別段關係はな
いものと思ひます

以上を参考資料として柳原明十は彈正郭を次ぎの如く想像します
巴城郭西隅の櫓台と相對した矢沢川の對岸から現在の二間巾道路に沿
ふて杉原卓氏の西に至りソレより南に一段小高き畑地の上を通つて寒狹
川縁に達する厩域内で勿論東より南へかけは矢沢川と寒狹川とで異し
て居る川以外の周邊は土居を以て囲まれたものである土居外に堀の有無
は不明であるが土を堀り取つただけは溝形の凹地が出来るのが當然 天
明の古図には現今に似た土居の形で土居外に四間六間位な宅の印があつ
て百姓吉右エ門家敷とあり又土居の外がわに小溝があるとしてあるが松
井翁の説から是れを評すれば ぜんじくだめといひたくなる

此郭に彈正門があつた記事はドレにも載せてあるがソレがどの邊にあ

ツたかは不明である皆川登一郎氏や未謀本部のものは現在の土居を本位としての西面であるから信用は出来ぬ
家老屋敷 彈正郭の北隣にありたるもので是れ亦長篠城九郭の一であると思ふ 現在では何んの形跡もないから境界を知る由もないが天明二年の古図に 此筋近年迄有りし土居なり今は平地畑となる との記事附きの地図と其筋と思はる、附近にある二三の小階段とにより想像して巻頭の如く地図を作製した 松井翁は貴宅は家老屋敷の内にあると思ひますがお考へはと申したならば其邊承知して居りませぬ宅の西北に宅の地、神様がありませぬ其邊の小階段が何か関係がありますのかねなど申されたに過ぎぬが結局家老屋敷の大体の位置は確定的のものであると信ずる
大手郭 家老屋敷の西より北に續いた一郭で是れも長篠城九郭の一である而かも武田軍が長篠城に迫る唯一の好地点であるから戦端はイツも此處から登せられたにか、わらずどの地図でも城郭らしく扱つて居らず従つて今に於て其境界が明瞭でないのは遺憾である 私が想像するに東端

は谷澤川迄達し西邊は大部分は矢も通らぬといふ殿敷といふ竹林で其敷が南に延びて彈正郭の西邊の防壁となり寒狭川べりに達したものでならん現今此邊一帯が殿敷といふ地籍名となつて残つて居る 又現存の蟻塚附近が大手木戸で武田軍との激戦の所ならんと稱して居る 戦後蟻塚の出現を以て戦死者の亡霊として蟻塚を建て、是れを吊懸した記事と相照應してこの辺が大手木戸跡ならんとの想像も多少意味のあることならん
大手郭には外邊は柵位で土居も堀も無かつたらしい
溜池に就て 倉屋敷の外郭をなす竹林に續いての溜池はかなり大きなものであつたと思はれる 外堀や内堀の引水は是れに依つたもので矢沢川より引水したといふは受取られぬソレハ矢沢川の河床は溜池残存部の敷地に比べて九尺位は低いから容易に引水することは出来ない假りに矢沢川をセキ止めたとすれば矢沢川ソレ自身が大きな水溜りとなつてまごまごすると城内に迄浸水する恐れがある
○松井翁の直説二三を紹介します

長篠城跡には他所の城跡に見るやうな石垣らしいものは一ツも無かつたやうである。今各所にある石垣は皆後からのものである。本丸入口の左側即ち大土居の終つた所などは八九尺位の高さでカブサルやうに切り立つて如何にも門の取り付けのやうに見へて居つても石垣ではなかつたと申された。是れは明十も左様に信ずる。なぜならば廢城同様になつた城へ天正三年二月二十八日に入城したる奥平信昌は大急ぎで城を修築し五月一日即ち入城から六十餘日中には武田軍に包圍せられたのであるから立派な石垣などが出来る筈が無い。大通寺裏の水杯井などアレも嘘の一ツです。随分本末を誤つたやり方で、すなせならば岡崎から松下とかいふ男が来て石碑を造つてから井戸跡を探がしたので、井戸によつて石碑を作つたのでありませぬから、あはれはイキマセぬ。其外に長篠城の事に就きても自分が盛んであるからとてコシラへ事をしてソレを後世に實らしく傳へたものがあります。困つたものであると嘆かれた。

今度私から松井翁に話しかけた

長篠城は城郭が各独立して居つたから自然澤山の門があつた筈であり、まずが急造の城であるから門などは木の形ばかりの木戸位と思はれ、まずが如何でせうと申すと、翁は門のことは知りませぬが本城といはずは本城の表門の取付けの土居でさへ石垣の立派なものが出まぬ位です。から門などはお説の通りであつたでありますと申された。

回 長篠城の名称

長篠城は一般には長篠城又は巴城と稱した。竹井城とは菅沼氏が築城當時は竹井が所々にあり井戸水も浅く且つ容易に井戸が掘れたからとて菅沼氏代々の呼ば名であつた。末廣城とか扇城とかは城域の形が元々然かもエン喜のよい名として奥平氏が呼んで居つた。

回 長篠城に關係ある人々の系圖に就きて

菅沼氏（長篠城を築きたる）

定忠木 | 菅定直 | 定成 | 貞吉 | 定晴 | 定廣 | 定継 | 小法師
田 | 定則 | 定村 | 定盈

菅成 | 元成 | 元直 | 元貞 | 貞景 | 正貞

○定忠 美濃土岐の庶流なり三河野田城主富長信資に養はれ伊賀守資長と名乗る後作手菅沼城主菅沼九郎左工門忠通の婿となり作手の木和田に任ず木和田三郎左工門と稱す

○定直 定忠の子又木和田三郎左工門と稱し永享六年足利將軍の命を受け忠通の男菅沼信濃守俊治を菅沼城に攻めて之を亡ぼし功により具遺領を賜はり菅沼城に移り菅沼信濃守と稱す是れ菅沼の祖なり

○定成 父定直の後を受け菅沼城に居る

○満成 は定成の弟北設楽郡荒尾城に移る 但其頃は設楽郡なり

○貞吉 定成の子今の田峯に築きて移り次第に傳へて小法師に至る

○元成 は満成の子永正五年五月長篠城を築きて移る

○元直 は元成の子別名を俊則又元通と名乗りたるらしい

史家牧野文齋先生は元直が長篠城を築くと力説せらる一面に俊則なる人物は無いと申さる然し文齋先生の困らるゝのは菅沼家の菩提寺である醫王寺には俊則以下正貞迄の位牌のあることで此位牌を証據に俊則時代に築城したと申されながら俊則なる人物を否定せようと鬼は北のりで痛しカエシで俊則は元直ならんと申された 然し醫王寺は其後二回火災があつた為めに問題の位牌は無いとは現任職横山良仙師の語 位牌の記事は時々各書で見らる處である

元成元直元貞の三代は今川に属し元貞の貞景は一時織田に属し更に今川に属し又徳川に歸せり 正貞は貞景の後を受け初め徳川に属し轉じて武田に従ひ更に徳川に歸した北のりも最後は武田の爲めに信州小諸に拘禁せられたるが武田の薨亡後僅かに其子孫を残すことが出来た 作手菅沼氏 長篠戦には直接には関係は無かつた 忠通 | 俊治

○忠通 其出不明である作手の豪族ではなかつたであらうか
○俊治 南朝の遺臣であるところから北畠氏が寛成親王の爲めに兵を伊勢に擧げんとしたるに應じて伊勢に至りたるに北畠氏の兵既に破れたるを以て菅沼城に歸つたが定直即ち忠通の女婿の爲めに亡ぼさる
興平氏

見 定政ー貞家ー興平 貞俊ー貞久ー貞昌ー貞勝ー貞能ー貞昌(信昌)
貞長 此人一代にして後なし

○定政 始め上州甘楽郡興平村に住す見玉庄右エ門定政と稱し南朝の遺臣である其^子貞家は尹良親王及其子良玉の爲めに信州浪合にて戦死せるを以て孫の貞俊貞長を伴ひ永享七年に三州作手村に身を潜めたり又一説に應永三十一年なりといふ
○貞俊 足利の爲めに迫害を蒙り九死に一生を得て諸国を遍歴し再び作手村に歸り世を忍ぶ爲めに故郷の名を姓とし興平監物と稱した宮崎村

の瀧山 其當時は作手に築き更に又作手の龜山に城を築き世々此處に住し貞能に至る 貞能の子貞昌に至り長篠に移り新城に移る

○信昌 作手に在城の時徳川の命により弱年の身を以て長篠城主となり武田軍に抗す
興平氏始めは今川に属し貞勝の時武田に属し貞能の時徳川に歸せり

回 長篠城と戦闘

長篠城としては前後三回の戦闘ありたり ソレが僅かに五年間位の出来ごとで然かも継続的であつた
第一回戦 元龜二年春武田の將秋山春伯守晴近が遠州二俣城主^{武田の天野宮内右エ門景賢と申し合也}本城を囲みて攻めたりども下すこと能はず晴近は四峯城の家无城所道壽をして扱はしめ人質を出して武田に降らしむ 時の城將は菅沼正貞
第二回戦 天正元年七月より徳川家康兵を出して本城を攻む城將は菅沼

正貞と正貞が第一回戦で武田に降つたので加番として入城した。武田の
 将室領一葉軒信俊小泉源次郎宗貞吉田七馬允為忠とであつた。
 容易に落城の見込みがなかつたので徳川の將領井忠次は久間村の中山繁
 近より火砲を放つて野牛部を焼いたので正貞は退城し續いて加番の將も
 退城して戦は終つた。此時包圍軍の將は久間村の中山繁に潘井忠次管長定
 盈 有海村に牧野宗成戸田忠次が陣し家康は塩沢村陣場であつた。
 牧野文齋翁は此戦争を八百長戦だと評せられた。私に九様に考へた。徹
 令八百長戦にした所が城を焼かぬ半ば廢墟の形にせられた。戦争
 第三回戦 長藤城が明き城の形になつたので徳川家康は天正二年に形ノ
 原城主松平又七郎家忠福釜城主松平三郎四郎親俊をして入城せしめた。
 五井城主松平弥太郎景忠は其子弥三郎伊昌を従へて主席格であつた。し
 い 戦記で見ると始め景忠と家忠とを入城せしめ後に親俊をして家忠と
 交代せしめたとあるが親俊は入城したが家忠は退城せせなかつたらしい。
 天正三年二月二十八日に奥平九八郎信昌を主將としし入城せしめた。同

年五月朔日には武田軍に包圍され、長藤城を陥すも落城せず。五
 月二十一日織田徳川の聯合軍と武田軍との城外の大戦後信昌は城と共に
 和ヶ原即ち今日の新城に移る。

五月一日包圍軍の將士(明十編纂の長藤戦争考より)
 醫王寺山の本陣 主將 武田勝頼

屬將・望月義勝 武田信光 武田信友 武田信登

望月雅信 跡部勝資 甘利晴吉 小山田信茂

水上山軍 水之上ミナノカミは徳川時代に旗本ノ士一色氏が前領地より天神寺

を移築してから天神山と呼ぶに至つた。

真田信綱 真田昌輝 一条信龍 土屋昌嗣

土屋直村

岩代平野軍 内藤昌豊 小幡信貞 小幡信秀 高坂昌宜

相本昌朝 小泉宗貞

大通寺山軍 馬場信房 馬場勝行 武田信豊 小山田昌行

366

31

▽

武田信元

一七

八名郡兼本側方面軍

武田信實 小見山信近 (兼本村)

三枝守友 三枝守義 尖戸大膳 草薙隼人助

堀ヶ懐岩 (兼本村) 和信業 長竹昌基 友町大膳

君ヶ伏床岩 (宇川村) 名和宗安 飯尾助友 飯尾祐国 名和田晴繼

中山岩 (久間村) 五味貞氏 飯尾助友 飯尾祐国 名和田晴繼

久間山岩 (久間村) 和氣宗勝 大戸直光 原胤成 倉賀野秀景

篠場野軍 武田信康 原昌胤 穴山信君 菅沼定房

遊軍 (有海村) 山縣昌景 高坂昌澄

以上

附記

此記を記述して稿を終へんとする時實飯郡牛久保町の岡田五九工門

氏が氏の祖先の作製に係る長祿城築造物に関する古文書を藏せらるる由を聞いたが若し狂見の機を得れば此今昔物語も更に改訂するの時期あるべしと信ず

因に岡田氏は天正以来の大工棟梁で連続として今日に及んで居る牛久保所に於ける權威ある旧家であるとのこと

訂改 長祿城の今昔 終

天正三年五月八日此日初めて長祿城の攻撃戦あり

天正三年五月十四日此日最後の長祿城攻撃戦ありて鳥居勝府請援使として出城

昭和十年五月八日 納本 非賣品

昭和十年五月十四日 発行 愛知縣八名郡井原町大字東畑三番地 柳原明十

終

